
レモンと水飴

中村瑞希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レモンと水飴

【Nコード】

N6120D

【作者名】

中村瑞希

【あらすじ】

花川高校に合格した森島結花^{もりしまゆか}は、彼氏である長谷川純^{はせがわじゅん}に早速伝えるに行く。何のへんてつもないカップル…？全然っ！！そう、彼氏と彼女の性格は、まるで正反対。結花は男みたいに、サバサバしてるし、一方の彼氏は、通称ずれメンと呼ばれる程の、ずれ男。そんな二人の青春で、可愛い(?!)(学校生活が始まってゆく！！)

華の花高生？！

私、森島結花は、たった今華の高校生になった。
花川高校の、一年生。

「う…受かったあー！！！」
やばい、人生で一番嬉しいかもー！！
受験番号の427をはねのけて！！
私は受かってみせた。

さっそく純に言わなきゃ！！

「純！あたし受かった！！」
ニッコニコの私とは、まるで6と9くらい正反対な純。

嫌ーな予感。

「え…嘘でしょ？不合格…？」
私は泣きそうになる。

「ぐすっ…俺、受かってる…。」
純の小さな小さな声。

「…はい？受かったの？」
まさかの展開。

「はい、受かりました。」

ガタッ
思わずベタな反応をしてしまった。

「何だよ！何で顔キレてんの！？」

「キレてないよー、泣きそうなの我慢してんのお！」純は声を震わせて言った。

こいつ、やっぱりずれてる。そんな事を思った。
でもこいつ、彼氏なんです。

顔は超イケメンなのに、性格は、ちょっと女々しくて、超ずれてる。
通称、ずれメン。

3

私と長谷川純は、去年の冬から付き合っている。
まあ、告白は勿論、純から。
それもウザイ位、超ー熱烈な。

純は告白の時から、既にずれていた。
だって、告白の場所は、何故か教室の隅。
しかも、皆がいるとき、大声で。

「結花ちゃん！す…つきですー！」

…そして極めつけは、大事な所で、まさかのミス。

あの時は、超恥ずかしかったけど、何でか、普通に

「私もー。」って言っちゃったんだよね…。

まあ、確かに、純は超大切にしてくれるし、私も好きだ。

…けど、純のずれ度は…ひどい。

例えば、一緒に下校した時に、

「喉乾いた」って言ったたら、猛ダッシュで走って買ってきたのが…。

…はい、野菜ジュース。

しかも、100%。

そんな可愛い彼氏と一緒に高校に入った訳。

私は、楽しみと嬉しいのと…不安。多分大丈夫。うん。言い聞かせる。

正反対の性格なカップルの波乱な高校生活が今始まる。

結婚指輪のキセキ?!

新しい制服。

新しい友達。

「ふふっ」

思わず笑いが込みあげる。

幸せすぎて怖いくらい。

高校生初日、スカート長くないかな、なんて気にしすぎて、遅刻疑

惑!!

「最悪　!!」

信号を一つ無視して学校へ向かう。

「おっ、おはよー…。」

完全に女子度ゼロな私。

もうやだ…。

私のクラスは…1 - B。

私の彼氏も…1 - Bとかゆう運命。

良いんだか、悪いんだか。

純はもうとっくに学校に着いていた。

「おはよう、結花」

テンションが…高い。

軽くひきつつ

「おはよう。あはー。」

とか言っておく。

あー、またずれメンて事がばれんのかー。

彼氏がなー…。

苦笑いする。まあ良いけど。

初日だから、二時間で終了。

純との帰り道。

中学の時と…変わらないみたい。

帰り道の途中に宝石屋さん。

「これ、欲しい！」

そう言っつて、私が指したのは、80万円のダイヤの指輪。

ちよつと意地悪した。

…つもりだった。

純を見ると、…まじだ。

まじで悩んでる。

き、きたー！！ずれメン。

「うっ嘘だから！」

必死で訂正する。

まじ、冗談も言えないわあ…。

ふう、と息をつく私の前を、純はすっごい速さで走っていった。入っていった先は…何故かスーパ！。

嫌いな予感。

満足気な純が帰ってくる。

その手には一本のちくわ。

「ちくわだけど、愛を込めたから！」

と言って、純は、ちくわを指輪のサイズにちぎり始めた。

そして、それを、私の左手の薬指に。

え、え
！！！！

ちくちくわあ?!?!?

「ぶっ」

思わず吹き出す私。

ずれてる。うん、絶好調に。

「気に入らなかつたかな…。」

不安そうに聞く純。

まじになってる所が、そこらへんのズレてる人とは格が違う。

「うっん！嬉しいよ。ありがとう。」

笑いを堪えて言った。

「じゃあ、食べよ」「
残りのちくわを、半分こして、私に渡す。

「いらねえし！」

私はまた、意地悪。

「何だよお！」

純の寂しそうな声。

こんな事できるのはね、純はずっと私の隣に居てくれると、信じていたから。

好きで、好きで、大好きだったから。

純は愛してくれてるんだって、余裕だったから。

なのに、あんなに不安になるなんて。

嫉妬、するなんて。

ううん、出来るなんてね。

嫉妬とまさかの初キス?!

今日の指輪事件は、超うけたなあ…。
家に帰って、自分の部屋の電気をつけて、指にはめていた、あのちくわを食べながら、思った。

「言う事は、いつもかつこよくて、彼女の心をぐっと掴むんだけどなー…。」

思わず声に出してしまう。

本当に惜しい!!

そんな、いつもあと一歩な純。

「でも、そんな惜しさが好きなのかもなー。」
思いつき独り言。

すると、ドアが少し乱暴に開く。

そして、ラの音のママの声。

「結花!さっきからご飯って言ってるでしょ!なーにブツブツ言ってるの!」

…時計を見ると、もう七時三十分。

もう、そんな時間?!!

どんだけ、思いふけてたんだ!?

私、純の事、大好きみたいじゃん! (…って当たり前!?)
恥ずかしくなって、顔が赤くなる。

階段を降りて、ご飯。

ちくわで、お腹いっぱいなんだけど…。

すぐ食べ終わって、二階に戻る。

「お風呂、入っちゃいなさいよお!」

下から、ママの声。
今は、シの音だったかも。

携帯を見る。

「新着メール一件」の文字。
誰だろ。

暗証番号を入力して、開いた先には、純の名前。

…ああ、やっぱりか。
なんとなく、予想はついていた。

「明日、一緒に学校に行かない？
結花が大好きすぎて、学校まで待てないよ！」

…すっげー。
普通に言ってる。

どうやら、純の頭の中に、「キザ」という、「」文字は無いらしい。

でも、その甘いメールは、それで終わりじゃなかった。
下のボタンを連打する。
すると

「結花、愛してるよ。」

…あー！！

惜しい！惜しすぎる！！

一回、さ行を余計に押したらしい。
さすが、王者の貫禄。

私の口角が上がる。

私は
「良いよ。じゃあ家の前で待ってる。私も、愛してるよ。」
意地悪な私は、わざと、「し」を強調させた。

それから、私はお風呂に入り、すぐ寝てしまった。

翌日、私は奇跡的に、時間通り起き、純を待った。

…いや、待たせた。

そう、我が愛する、純くんは、もう既に、家の前にいた。

「おはよ」

「はい、おはよう。てか早っ。」

「駄目：だったかな。」

「べっ別に平気だけど。」

お前は彼女かつ！！
実はそう思った。

まあ、なんの問題もなく、学校に着き、純と私は席に着く。

…ん???

女子の目が違う。

純にハートマーク。

そら、そうか。

まだ、何も知らない女子の中では、まだ純は、イケメン。
私は慣れていた。故に、こんな推理も。

「昨日静かだったのは、まだ噂中だったからか。」

純の席は、女子だらけ。

その中に、一際可愛い、…てゆうか、純のタイプを、きっちり捉えた女の子。

名前は、きのした わいこ「木下麗子」…らしい。すると、純は、早速その女の子を見つけ、にっこり笑いかける。

そして、衝撃の一言。

「俺、君の事好きだよ!」

…ええええー!!?!

何、告白してんの!?!?!
ずれすぎ!?!!

すると、麗子（勝手に…）は、

「今度デートして下さいっ!」

…そりゃーなー。

「うん、考えとく。」

…こいつ、馬鹿だ。

その場は、何とか我慢したものの、昼休み、早速取り調べ。

「ねえ、どういうつもり?」少し怒った口調で。

「違うよお、俺が言った好きは、良い人そう、の好きだよ?」

完っ璧なズレ。
素晴らしき…ズレ。

「ばーかーかー!!!」

嫉妬もあり、強めに言った。

「あの麗子って子はねえ、純が好きなの!あんな事言ったら…勘違
いしちゃうんだよ…っ」

どう頑張っても、涙が出てきちゃう。くっそー!

でも、純が取られちゃう。

「好き」は、私だけに…。

それを見た純は、私よりも泣いた。

「うっうっ…ごめんねえ…本当っ…ごめんねえ…」

そういつて、私にキスをした。

えー!!!

こんなシーンで初キスを終えて良いのか?!!

…これもこれでいつか…。

そう思った。

純がいるなら、良いと思えた。

私達は、屋上で、キスをして、お互いの涙を、お互いのハンカチで拭って、途中まで手を繋いで、教室まで帰った。

ラブレターの悲劇?! (前書き)

いつも読んで下さっている皆さん!!

こ

んにちは 中村瑞希です!!

今回は、いつもとは、ちょっと違う、つなぎの様な内容になっています。
この話によって、次回をもっと楽しみにして下さい
と嬉しいです
また、感想や意見がありましたら、是非書き込んで下さい!!
とっても励みになります!

では、どうぞー

ラブレターの悲劇?!

ちよーっと昨日のキスはさすがに恥ずかしかったな…。
結び慣れた、制服のネクタイを素早く結びながらそんな事を密かに
考えた。

下で、純が待ってる。
相変わらず…早いっ。
食パンをくわえて、純のもとへ。

「純は昨日のどう思ってた…。ちよっと、いつもとは違っかな
…?」
そんな思いでいっぱいでした。
……しかーし!…!!…!!
「おはよー」
一ミリも変わっていなかった。
そうか、純は、そういう奴だった。
恥ずかしっ!…!!

「お、おはよ…」
微妙な返事をしてしまう。やっぱり無理ー!…!!

聞こっかな…。
聞こっかな…。
……。

出陣じゃ、結花！

「あっあのさ…純は…恥ずかしくないの？…昨日の…」
「噛みまくる私。」

「…こういう時、何て言ったら、結花は喜ぶの？もう一回、無言でキスとか？」

純は、真剣に聞いてきた。

…いやいやいや。

普通、そこ彼女に聞かない。

はい、そうですね。

今日も絶好調のズレ。

まあ、変な応答より良いけどさ。

「うーん、純の気持ち伝われば良いんじゃない？」
「我ながら適当なアドバイス。」

すると、純は隣で、

「結花ー！！すーきーだー！！！！！！」

すごい大声。

もう本当に、卵くらいなら割れるんじゃないかと本気で思っつくくらいな。

「嬉しいけど、朝からうっせ。」

笑いながら、言う私。
なんか楽しいな。
うはは。

純が隣で口を押さえてるのを見て、私も押さえる。意味はない。つまり…ばカップル。

学校に着き、下駄箱を開ける。
すると、分つきやすい、ラブレターが一通。

「FROM：竹田弘一」
たけだ こうこういち

ああ、おなじクラスの。なかなかのイケメンだっけ。

別に興味無かった。
純もいるし。
でも…好きだって。
私の事。

行くだけ…行ってみようかな。
それで、純との帰り道、いきなりバラして、びっくりさせてみよ

こんな軽い気持ちで、後に大事件になる事を知る由もない結花であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6120d/>

レモンと水飴

2011年1月22日14時50分発行